

12 十津川・21世紀の森

—120種類のシャクナゲが見事です—

5年生になって2か月の嘉彦君、宿泊学習に行ってきたそうですね。いろいろな活動を通して、友達と一層親しくなれたことでしょう。

おじさんは、十津川村の家庭教育学級でお話した後、「21世紀の森」に行ってきました。ここは、十津川村置村100年を記念して開設されたところで、紀伊半島に自生する木や草を集めた「樹木見本園」から世界遺産に指定された「奥駈道」で結ばれた玉置山地区までを含む200ヘクタールは紀伊半島森林植物公園となっています。

十津川村は日本一大きな村、源泉かけ流しの村として有名ですが、ここに至るまでにはいろいろなことがありました。明治22年8月には死者168人、山河の様子がすっかり変わってしまったと言われるほどの大水害にあいました。家や田畑を失った大勢の人たちは新天地を求めて北海道に移住し、新しい村を作りました。この村は発展を続け、今では新十津川町という町になっています。村に残った人たちもまた荒廃した郷土の復旧に立ち上がり、困難を乗り越えて、十津川村を築かれました。今も、十津川村と北海道の新十津川町の人たちは互に行き来し、協力して、村づくり、町づくりに努力しておられます。

明治22年に大崩壊が起きた地に築かれたこの森には、絹谷幸二さんのフレスコ画を焼き付けた水害記念碑「十津川に昇る太陽」があり、この村の歴史が刻まれています。

さて、この森の見どころに、世界の国々から120種類1万本のシャクナゲを集めた「世界の森」があります。シャクナゲはツツジのなかまで、常緑性の低木ですが、ここには数mになっている外国種のもの

もあります。そして、見頃を迎えた花がとてもきれいでした。

また、展示施設・森林館では、村の美しい自然が三面マルチスライドで上映され、この村の四季を体験することができます。森は、酸素を作り、私たちに木材を与えてくれます。風を防ぎ、気象をやわらげ、水を貯え、人々にやすらぎを与え、健康に役立ち、動物にすみかを与えてくれます。また、木材は軽くて強く、弾力があって、歩き心地がよく、音をやわらげ、熱を伝えにくい、といった素晴らしい性質を持っ



ています。こんなことがよく分かるように展示されており、十津川村の地元材を使った木工体験が行われる日もあるそうです。大切な自然が失われていく今、厳しい環境の中で自然と共に生き、暮らしを高める努力をしてこられた方々に学びたいものです。

(やまと・平成19年6月号掲載)

スポットの案内

21世紀の森・紀伊半島森林植物公園は、十津川村小川112-1-1にあって、火曜日と年末年始は休園日、利用できるのは9:30～16:00、11月から3月は10:00～15:00、入園は無料です。

お問い合わせは、森林館(電話 0746-62-0567)まで。

理科のワンポイント「十津川を理科する」

十津川村は奈良県の南端にあって、東西 33.4km、南北 32.8km、面積は 672.35km²、奈良県の約 5 分の 1 の広さを占める日本一大きな村です。この村と野迫川村、大塔村、西吉野村の 4 村は吉野郡西として 1 つのまとまりを作っていましたが、大塔村、西吉野村は五條市となりました。私がこの地域に出かけたのは、県教育委員会学校教育課に勤務することになった昭和 55 年のことでした。そして、教育研究が熱心に行われていたこの地域には、この年の 4 月から 12 月の間だけで 26 回も学校訪問をしたメモが残っています。

そうした学校訪問の中で、次のようなことが強く印象に残っています。

(1) 上野地小学校の大野壽男校長先生は「学校を中心に描いた 1km の円内は教室であると考えています」と話されました。そして、子どもたちは自然観察の場として活用し、豊かな理科学習を展開していました。そうした活動の様子は、この学校で飼われていたカモシカや子どもたちが給食の食膳にのぼることを楽しみに見守っていた校庭のサクランボの木とともに今も思い出されます。

(2) 五百瀬小学校(統合されました)は山に囲まれ、学校の周囲は森林や傾斜の急な畑でした。この学校でもイネの栽培を体験させようと学校に田んぼが作られていました。この田んぼは先生と子どもたちが力を合わせて校地の一角を掘り、水を通さないシートを敷いて、土や泥を入れて作られたものでした。イネの葉がさらさらと風にそよいでいたことが思い出されます。

(3) 二村小学校の子どもたちは学校の近くの風屋ダムに赤潮が発生していることに気づき、J 先生と研究を始めました。赤潮の発生する

場所、発生する様子を調べ、記録しました。電源開発の会社の人の協力でダム湖をパトロールする船に乗せてもらい、プランクトンを採集し、水温などを測定し、ダム湖の環境の解明に取り組みました。こうした研究の取り組みは次の学年に受け継がれ、十津川を学ぶことにつながって行きました。それは、今から 20 数年前、まだ総合学習などといった取り組みが行われていない頃のことでした。

(4) 野迫川村立北股小学校(統合され村に1つの小学校になりました)には「探検の森」という施設が作られていました。学校の裏山を活用したこの森には多くの教材植物が植えられ、一休みすることのできる所が作られ、自然と親しみ、自然にふれあうことのできる場所となっていました。子どもたちはひまがあれば、ここを駆け回っていました。

こんなふう「理科する」取り組みが行われていた十津川村の小・中学校の先生たちによって著された「十津川の自然案内」と題する書をいただきました。サブタイトルが「紀伊山地の霊場と参詣道の生きものたち」という B6 判 478 ページの書は「十津川に見られ、十津川で採集され、撮影されたものだけ」が使われた図鑑なのです。こうした取り組みが子どもたちを、そして、大人を身近な自然の探究へと駆り立てていくのだと思います。

